

# せたかむい

## 年表で読む

### 古平の歴史

《54》

発行・古平町史編纂室  
古平町文化会館 842-2590  
第148号・平成14年1月1日

#### 海運の移り変わり

##### ■アイヌの海上通行

陸上では道がなければ行動に不便でしたが、海上は交通用具さえ持てば、自由に往来したり海での漁もできるほか、物を運搬するにも便利でした。

アイヌの人たちも、早くから丸木船・板綴し舟、木の皮舟などを作って利用していました。

##### ■松前と古平間の海運

場所請負いによって早くから開けた古平では、生産物の輸送にまず松前との海運が始まり、間もなく北前船による本州との海運が盛んになりました。

享保十六年(三三)、津軽藩士の編集した記録に、

「……松前城下よりいしかり(石狩)まで、船路で順風だと

六、七日で行くことができる。ただし、陸地は無理である。」

とあり、これだと古平までは五日程で来られたようです。陸地には満足な道がなく、海路に頼るしかなかったのです。

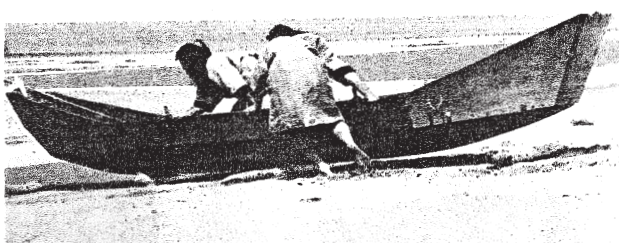
##### ■岡田家の北前船

古平場所の請負人であった岡田家では、初めは大量の品物を運搬するため便船を使っていたが、余市場所請負人の竹屋長左衛門の荷物といっしょに積んだ船が遭難し、そのときの一通の文書が残され



舟と木丸のアイヌの板綴り舟 ↓

ています。「私の持ち船幸永丸がヨイチ場所所荷物を積みましたが、積み荷が少々不足でしたのでフルヒラへ廻り、積み荷をお願いして出帆しましたところ、はからずも時化に遭い、仕



海難により荷物を損失したときは私共で弁償し、もし弁済できないときには持ち船幸永丸をお渡しいたします。後のためこの通り証文をお渡しいたします。

加州橋立幸永丸 米木小一郎

宿証人 京屋平八

天保三辰年十月 竹屋長左衛門殿

岡田半兵衛殿

その後、岡田家では収益を上げるためにも船を持つようになり、最盛期には五隻の持ち船がありました。

##### ■岡田家の持ち船

- 嘉永四年(二五)、岡田家一代岡田正猷の商用目録には、
- 寛倅丸 九四二石
- 順得丸 九二五石三四
- 叶丸 八七五石一六
- 隆興丸 八五五石三二
- 和合丸 五〇八石四六
- 計 四一〇六石二八

方なく大切な荷物を少々海に捨て、飛鳥に入港しました。(略)ここから上方へ着くまでの運賃は無料とし、もちろん

# 大正九年

3/28 沢江、歌棄から山中にかけて大漁、朝から寒く、道路だけでなく家の中の硯の水も氷っている、本陣の浜へ行つたが、潮が引いて磯がずうっと出ている、昼前から気温が上がリ、外に出て見ると気が晴れ晴れするようだ、モッコしよいの人たちの話し声で九時ころまで賑やかだ、金魚売りが来た。

3/29 寝ているとガヤガヤとモッコしよいの人たちの話し声がする、浜に出て見ると前浜一帯は大漁だ、ドロノ木歩方が一五、一六杯、港町から入船町にかけてほとんどが八、一〇杯、沢江方面も同じぐらいのようだ、今まで漁が無かった前浜が大漁なので歩方連中も大騒ぎ、鯨の走りとして古平は近年にない大漁だ、刺網も海岸から二、三間のところに刺したのが大掛かりだ、あまり珍しいのを見てみると、波打ち際まで鯨が見える、近年にないことだ、浜は大変な景気だ。

3/31 海上は静かだが漁は無し、店は閑散、サバサキとツナ

ギツラがよく売れる、八反田、熊木、中漁場から網の注文がきたがもう手持ちが無い、残念なことをした、来年は建網関係のものも揃えて置かねばならない、月末だが鯨場で忙しいので、掛け取り(集金)にも出かけられない。

4/1 鯨漁は歌棄山中の崎長、△、△、△などがとれた、どこも鯨割きの手が足りないようで、妻も頼まれて鯨割きに行く、二時から防火防組合で土場方面を廻る。

## 高野名幸作さんの日記から



【49】

4/1 鯨漁は歌棄山中の崎長、△、△、△などがとれた、どこも鯨割きの手が足りないようで、妻も頼まれて鯨割きに行く、二時から防火防組合で土場方面を廻る。

4/3 朝九時ころから風雨が交じって時化模様になってきた、この天候も夕方の五時ころには止んで、海もなきてきたが投網はできない、漁夫も久しぶりでゆっくり休めるだろう、この日、岩内方面では大暴風となり、岩内と磯谷で、三〇余名の漁夫が溺死したという。

4/8 鯨大漁、今月の漁獲高は一万石にもなるだろう、美国や積丹も大漁、(困)の入舸漁場では二杯もとりに、梓船を古平まで引いた。

4/12 今日もまた沖揚げがあったが、鯨つぶしが遅れているのでこの漁場でも人集めに忙しい、(困)から貰った鯨を納屋に掛けたが、一〇本とほかに三〇つら程もあった。

4/6 鯨大漁、歌棄山中で△、崎長、△など大漁だ、崎長で

4/9 鯨大々漁、今日もまた一万石の水揚げがあり合計五万石だ、浜に出て見ると、沖でも陸でも多くの人で沸き返っている、浜全体が大漁だ、刺網などはみんなケラ掛かりで、ネコの手も借りたい程の忙しさだ、大漁なので鯨

4/14 歌棄山中、方面は今日も大漁、(丸)二〇杯、(中)〇、(△)も二〇杯ぐらいつつ獲る、刺網もケラ掛かりの状態だ、こんなことも珍しい、今日は三千石、累計で六万石。四月十四日の小樽新聞によれば、

←(次ページへ)

余市 五万四〇〇〇石

美国 六万二〇〇〇石

積丹 五万五〇〇〇石

古宇 九万一五〇〇石

岩内 二万二〇〇〇石

4/16 入船町から前浜、群

来村、沖村一帯にかけて鯨魚があ

った、二、三杯から一〇杯ぐらい

とれた、今年のように毎日毎日鯨

魚のある年も珍しい、モッコしょ

い、鯨割きでどこも人手が足りな

くて大変なようだ、時々雨の中寒

風も吹く、株式が暴落したため生

糸、綿糸相場も暴落する。

4/17 昨日からの風が暴風

となる、あまり風が強いので、火

防組合で警戒のため見廻りする。

4/18 鯨魚なし、町中どこ

も鯨の置き場がない、こんな大漁

は前代未聞だ、昨日の暴風も静ま

り安心した。

4/19 町中はどこも鯨の始

末で目の回るような忙しさだ、店

はこのところ閑散としている、全

道第一の大漁なので景気も良い。

4/20 浜一帯で二、三杯ず

つとれた、鯨魚も何となく盛りが

過ぎたように思われるが、例年の

株式の暴落で、生糸、綿糸の暴落

に続き、肥料、白米も下落し、鯨

製品も最初の一本二〇円から一〇

円ぐらいになりそうだ。

4/23 時々雨が降り、沖か

らの風も寒い、この天気ではかす

干しもできない。

4/25 ようやく天気も快晴

になり、干し物も出せるようにな

った、群来村と歌棄で三、四杯と

れた、野塚からホッケ刺網を買う

客が来る、ホッケが大漁とのこと

だ、店でははかりが売れる。

4/28 漁もなくなり、浜も

さびしくなった、カレ、ホッケが

かかり、タラも釣れているとのこ

とだ。

5/2 今日には平出派（平出

喜三郎）の政談演説会が、午後五

時半から禅源寺である、平出さん

は朝八時ころ来て町内を戸別訪問

している、演説会には大勢の人が

集まった、選挙もだんだん白熱化

してくる。

5/10 衆議院議員選挙があ

り、開票の結果、小樽区では山本

厚三（憲政会）が当選、郡部では

平出喜三郎、中西六三郎が当選し

5/17 雨天、小樽から汽車

で二二時に余市に着く、陸行で帰

る、四日間も雨が降り続いていた

ので、山道は泥田のようにぬかる

ところがある、出足平の得意先の

ところで休ませてもらう、道中で

見て来たが、ムシロに干したかす

はウジがわいて腐っているのもあ

る、これでは大した損害だ、湯内

に着いたのが午後五時、山科さん

に寄って夕食をご馳走になる、い

ろいろと話をしてお発し、帰宅し

たのは七時であった、悪路のため

わらじを二足切らした。

5/19 昨日晴れていた天気

も、未明からまたシヨボシヨボと

雨が降り出した、雨が続いて建網

連中のところではかす干しもでき

ずにいる、一日の雨で町全体では

千円ぐらいの損害になるとい

う、なんでも美国では、ウジのわいた

かすを海に投げたということだ、

東京の綿糸市況は下落が甚だしく

三二〇円とのこと、高値のときの

半値以下になった。

5/20 今日もまた小雨が降

る、家の横の道路ばたに干してあ

るカスも腐って、ウジがわいてい

うといわれている、胴鯨は一〇日

前は一円一五銭だったものが、今

は一円五〇銭になったと浜では喜

んでいる、本州方面では、かすの

不足から、にわかには値段が暴騰し

ているという。

5/21 午後四時から値立会

があるので閑月亭に行く、見晴し

の良いところだ、六〇余名が会合

する、双方の値段に相当の開きが

あり激論が沸騰する、あわや活劇

になろうというほどで、実に見も

のであった、ようやく胴鯨の値段

が二八〇〇円でまとまった、九時

半ころに終わり酒肴が出る、一〇

時半ころ散会する。

5/22 鯨成金や、景気の良

いのを当てこんで、商人が入り込

んで来た、瀬戸物屋、小間物屋な

どが大声で景気づけている、大漁

で景気も良いので、店も人気があ

る、本でも明日から五日間、呉服

物の破格売り出しをするというの

で、ピラ書きを頼まれた。

5/23 雨はさっぱり止まな

い、道路はグチャグチャで呆れた

ものだ、寒風が吹き海は大荒れと

なった、リンゴの花も咲いたが、

この雨が心配だ。（以下 次号）

断章小説「ふるさと遙か」 第30編  
「青年会」 追憶

吉川義雄

「……北の海の、冬の恐ろしさは、言うたとして分かるまい……」  
劇場内は静まり返り、主役の動作に満員の客が食いつくような目を向ける。

突然、主役がコンコンと咳をし始める。次の台詞(せりふ)を忘れた合図である。幕の陰に台本を構えていたブロンペーター役が、大急ぎで押しこころした声で「ある時は、帆柱につかまってお前の名を呼んだ……」

場内の前の方からクスクスと笑いが起こり、主役の頭の中が真っ白になり、補佐された分の台詞しか言葉にならなかつた。

あの頃のこと、生涯忘れられない思い出よなア」  
「夜になると、加工場のものを片付けて、一生懸命芝居の稽古をやったよなア」

「どっかの家では、毎晩女性たちが踊りの練習やっていたな」  
「消防番屋の二階は一番いい場所だったが、毎晩借りるわけにもいかないし、全部を見れないから、いったいどうなるのやら、当日までは皆目分からなかつた。」

古平青年会と、他の団体を睥睨(いげん)するような名前をつけた。戦後の漁師町の青年団体は浜の気風のせい、やることも何でも派手だつた。

余市駅からの割当てで、汽車の切符さえも満足に手に入らない時代、「よしッ。やるベッ」役員会で計画したことは、バスを貸し切りでの旅行であつた。

小樽から洞爺湖畔のバンガロ一二棟貸し切り自炊。札幌動物園見学後帰る。

壮大な計画は予算不足。それではということ、新地、浜町の劇場で二回の興業、少し不足ということ、で稲倉石まで。

「あれから何年経つてのやら」ふるさとの若い仲間たちと、青年期を走り抜けた想い出の数々」

当時、何を求め、何を考えて突つ走つたのか、山本自身も分からない。ただ、そこにふるさとの山河があり、海があり、友がいた。刻々かわる時間は永久に戻ることはないが、温め合つた友情は幾歳月を経ても、鮮烈な色彩を増してのちの中に残る。

「ふるさと」という言葉に封じ込められた、それぞれの思いは、それぞれの喜怒哀楽と共に、消えることなく生涯続いていくのだと山本は思う。

小難しい宇宙の輪廻(えんご)など考えたくもないが、地球の一角の「古平」。そこで生まれ、そこで育つた自分にとって、重大な理由があつたのだからと山本は考える。身内とは別に、あ

れだけの友達と友情を深め合つた一時期の幸運を、彼は改めて「よかつた」と噛みしめる思いで喜ぶ。

八十歳を迎える山本に、ふるさととは物理的に遠くなつた。それに逆行するように彼の想いは年と共にふるさとに近づいてゆく。

《ふるさと遙か》 終わり

× × ×  
明けましておめでとうござい  
ます。『せたかむい』の紙面を  
占拠して、この稿で三十編も小  
説もどきを書かせていただきま  
した。自分のことは、時には辱  
しくて思い切つて書けないこと  
もありませんが、この形ですと、  
意外に他人のようなふりでごま  
かせました。

ひと休みしてから、また、ペ  
ンをとらせていただきたくと思  
つております。

大変な時代ですが、皆様のご  
健勝をお祈り申し上げます。

吉川義雄



悪い出す——激浪の恐怖と  
人々への感謝をこめて

大 澤 文 子

底冷えの続く晩秋となり、うつすらと初雪が草生を染める頃。思い出すのはあの大時化のことだった。あれはたしか昭和四十六年であつたらう。札幌に住む長男夫婦が引越したため、生まれの数カ月もたぬ、稚な孫の智子をわれに預けて帰つて行つた翌日のことであつた。

その日は朝から大荒れの天候。何に狂うか、擁壁を強打した大波は、あつと言う間もなくわが屋根の一部を剥ぎ取り、荒海に飛ばしてしまつたのだ。

なおも荒れ狂う大波はわが海側の部屋の窓を突き破り、まるで這うがに二部屋の畳の上をなめつくしてしまつたのだ。驚きと恐怖のために夫は右往左往するのみ、私は智子を守るのがせい一ばいだつた。

その後、急を聞きつけてこられた遅しい男性の方たち、そして小竹栄子さんたち。すばやく大波の被害を受けた荷を次々積み上げ、その夜の寝場所を作つてくださった。智子を背負い呆然と立ちつくす姿を見かね、前田きみよさんご一家がかけつけてくださった。

『早く早く、智子ちゃんを連れて家へ泊まってね』  
うれしいお言葉に考える間もなく、智子をおんぶしねんねこを着て、差しだされた雨傘の人となつた。

前田さんご一家のご厚意に甘えたその夜は、新しいお布団に新しい敷布にくるまれ、智子はすやすやと眠ってくれた。心から前田さまご一家に手を合わせたのには言うまでもない。  
昨夜の大時化はうそのように

晴れあがつた翌朝、朝風の海面をこめのひと群が舞つていた。わが家の前には打ちあげられた大石小石がごろごろ転がり、潮の引いたあとの白い跡が幾条も残つていた。

早ばやとまた遅しい男性の方たちがかげつけられ、潮にぬれた畳を軽々と川原に担ぎ行かれ、火をつけてくださったのだ。たちのぼる白煙の中を、物珍しそうにごめの舞つて行くのが印象的だつた。



あれから三十年もたつた今でもこの時季になると、町内の遅しい男性の方たち、そして前田さまご一家、やさしいお友達のご好意を忘れることはない。心から消えることのない文字「感謝」の二文字をお贈りしたい。最後に大時化のことを詠んだ短歌を載せてみよう。

真夜の時化轟き狂ひわが居間の雨戸を割きて怒涛頽るる  
雨戸割き頽るる怒涛はふた部屋の上を這ふがに流るる  
暴風はわが古家の大屋根を剥ぎとり海に突きとばしたり  
術もなく呆然とたつ家びとを助くると真夜を君ら馳せ来し  
一夜明けわが家の前に様ざまな砂石揚げて時化は止みたり  
潮につかり術なき畳きみ達は磯に干さむと運びくられたり  
朝明けの川原にいでて豊燃す煙は低く磯になづさふ  
時化止みて潮のつきし竿竹を拭けば草生に粒となり落つ  
時化止みしわが家の前に幾條も潮の引きし白き跡見ゆ  
一夜さの時化も止みたり鈍色の海面を低く海猫の飛び交ふ  
朝明けの海面を遠く水蒸気あがり沖辺に低く霧笛なりつぐ

# 古平いろいろはうた

## 仲間みな集いて語る秋天下

昭和27年8月、俳人としても著名な高野素十が吟遊の途中古平を訪れました。

折から、結成されて間もない古平ホトトギス会（会長水見悠々子）が素十の来町を知り、まつや旅館で歓迎の宴が開かれました。そのとき水見句丈が、母校でもある古平小学校が今年創立七十七周年記念を迎えることから、これにふさわしい一句をお願いしたところ、この四月に刊行した句集『雪片』から、ふるさとを同うしたる秋天下の一句を揮毫してくれました。句の意味は、「同郷の人々の集まりがあった。幼い日を懐かしみ、今日の互いの幸せを語り合いながら、ふるさとの秋空の下に明るい笑顔がある。」



高野素十（昭和30年撮影）

北海道という広大な自然を背景にした、純真で素朴な人々の明るい集いと、あくまでも青く広い秋空とが、読む人の心の中

で調和し、さわやかな気分を覚える句です。

句丈は、せっかくの色紙なので句碑の建立を考えましたが、記念事業は早くからその内容が決まっていたことから、これは後日に行うことにしました。しかし難題は、以前から素十は自分の句碑を建てることを許さなかったことです。いたずらに名を挙げることを大変嫌う、素十の性格の一面です。

そこで「先生のお叱りは覚悟の上で——」ということで、昭和29年7月、古平町開基八十五周年の祝典を機に、校庭に句碑を建立することにしました。

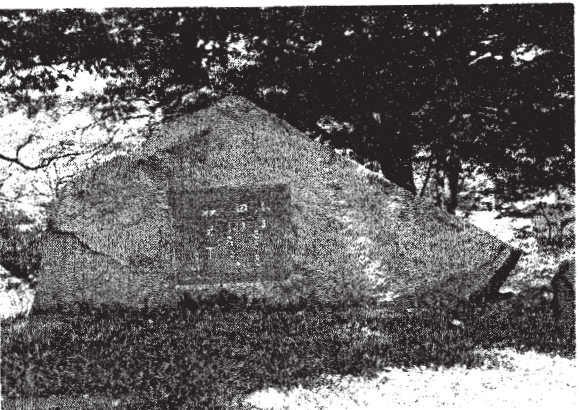
碑石は、丸山岬の海岸から採取したややひし形の硬石で、これに長方形の仙台石の碑面をはめ込んであります。

さて、句碑は完成したものの、句碑嫌いの素十には何と報告したらよいものかと思案しましたが、まずは詫び状と完成を喜ぶ関係者の声を伝えたところ、素十からの返書には、「句丈君がそう言うのなら、まあいいさ。」という、いともあっさりとした寛容の言葉であったそうです。

ここに、句碑嫌いで通っていた高野素十の最初の句碑が、古平町の地に建つことになったわけです。

高野素十（たかのすじゅう・本名II興巳）は明治26年、茨城県山王村（現在の藤代町）の農家の長男に生まれ、東大医学部で法医学を学んでいましたが、一年先輩で、後に高浜虚子の門

高野素十句碑



で共に俳句を競い合った水原秋桜子に誘われ、東大俳句会へ入会しました。

秋桜子の書いた中に、「はじめは一種のやじ馬的興味で参加、あまり熱心な仲間ではなかったようだ。それが高浜虚子に師事、『ホトトギス』に投句しはじめるとともに次第に熱心になり、その成績もしいに上昇、東大俳句会の有力」※

# ら ヲッパ鳴リススキナイでの射撃会

軍隊に勤務したり関係した人を軍人・軍属といいますが、軍人であっても、今は実際に軍隊に勤務していない人を在郷軍人と言っていました。明治43年、陸軍によって帝国在郷軍人会が設立されました。

それ以前から各市町村にはこのような団体はありましたが、これらを統一して、軍隊と国民とを結びつけるものとして設立されたもので、大正3年には海軍軍人も加入しました。昭和11年になると勅令によって、これまでの任意団体から公的な団体に変わったのです。

古平町でもそれまでの古平報国会が解散して、新たに帝国在郷軍人会古平町分会が結成されました。

在郷軍人会では毎年軍の高官が来て、主に市町村ごとの活動状況や装備についての検閲や、銃剣術、射撃訓練の競技会などが行われていました。

射撃訓練については、ススキ



ナイ（カモイギ沢とススキナイ沢との間の幅800メートル程の平坦な丘陵地帯）の土地を借り受けて会員が整地し、ここを射撃訓練場としていました。

秋になるとここで射撃大会が行われ、当日は町中にラッパの音が響き、軍装をした在郷軍人がススキナイまで行進し、大勢の町民も見学に行き盛況だったようです。（高野名幸作日記）

備品台帳を見ると、旧式な村



ススキナイ射撃場での大会風景

田銃（明治10年ころの陸軍の制式銃）や、払い下げになった三八式歩兵銃が計六丁と記録されていますが、幸運にも全く事故は無かったようです。当時の射撃場がどのあたりだったのか、ススキナイは広い地域なので現在は全くわかりませんが、その後、カラマツが植林されたと聞いています。

※メンバーと見られるようになった。」と、あります。

虚子に師事するようになったのは30歳ころでしたが、やがて虚子門下の\*4Sと言われ

れるようになり、ホトトギス雑誌欄の選者を担当しましたが最も活気にあふれ、他に影響するところが大変大きなものがありました。

素十の俳句は、虚子の言う花鳥諷詠・客観写生を忠実に受け継ぎ、その特徴は実際にものを見、簡潔で明快であると言われています。

学者としてはその後、新潟医科大学助教授になり、さらに同大学長になり、昭和28年に定年で退官しました。退官後は名誉教授となり、奈良医大教授も勤められました。昭和51年10月逝去されました。享年八一歳。

\*4Sとは、むかし流で言えば、四天王。とても言ったところでしょうか。昭和の初期、ホトトギスの隆盛期を築いた水原秋桜子・山口誓子・阿波野青畝・高野素十の四人です。

\*\*\*

あれから三十年・今なお続く鉱山の絆

# 一ノ関で本州稲倉石会

富山市 高橋 藤蔵  
(元・稲倉石鉱業所勤務)

三十年も前に閉鎖した企業の社員が、今なお集い合い親交を温めているのは珍しい事ではないでしょうか。

閉鎖され、ば、閉鎖解散式でお終いになるのが常だと思っておりますが、私たちの稲倉石会は今も綿々と続いております。

しかし、長い時の流れは否応なしに会員を高齢化させ、会員の減少にと追いやり、集まる機会も途絶えがちになっておりますが、そんな中でも「本州地区稲倉石会」は、幹事さんの献身的なお世話で毎年開かれております。

今年の「本州地区稲倉石会」は、岩手県の一ノ関で行われたのですが、実は、旧鐵興社では稲倉石のマンガン鉱山のほかに

一ノ関の近郊にも石灰石鉱山を

所有し、稲倉石と技術者の交流が盛んに行われた「山兄弟」があり、稲倉石鉱山が売山される

一・二年前に入社した新進の学卒者一名が、稲倉石で実習した鉱山知識に磨きをかけ、この鉱山で責任者となって活躍しているのです。

今回、このお二人がすゝんで幹事役を快諾され、この地での開催となったのです。

九月三十日。一ノ関の温泉郷真湯山荘で開かれた会合は、常連のほか、五名の初参加と特別参加を含めて二十一名の参加がありました。

特に遠路札幌から馳せ参じた方や、四十数年振りとなる再会者もあり、笑顔の皆さんが大歓

迎で迎えてくれました。

どなたも、体躯・頭髪は齡相應の風貌となり、すぐにはお名前を思い出せない方もおりましたが、交わした話しっぷりと仕事は昔と変わりなく

「やあ、やあ、達者か。髭を生やしてるんで分らなかったよ。今はどうしてる」

と、稲倉石で別れて以来の人生を語り合っていました。

宴会での話題は、鉱山での苦労話が今となっては楽しい思い出となり、特に良質のマンガン鉱脈を発掘して鉱山の寿命を延ばし、樽酒を飲み交わしながら祝い合った「大直り」が、鉱山

マンの最高の喜びだったと懐かしんでおりました。

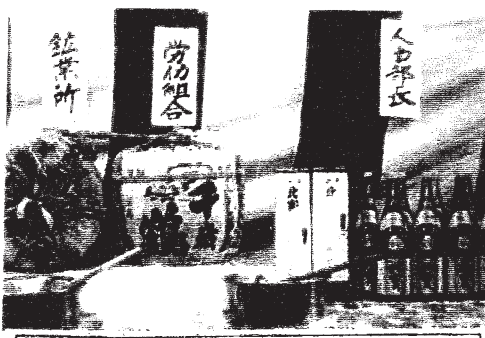
また、転勤・売山によって稲倉石鉱山を離れた後、鉱山での技術を生かして転職した会員・新しい未知の分野に挑戦した会員・自分で事業を興した会員など、それぞれが苦勞を重ね世の荒波を乗り越えて来た事を、もつれる舌をアルコールで潤しての語らいが、止めどなく深夜まで続きました。

翌日は生憎の雨となりましたが、ゴルフ班と觀光班に別れた新たな思い出を作りました。

来年の会合は、採石事業の社主となって活躍している会員が幹事となり、山形で開く事にしました。

再来年は、会員の減少と高齢化がすすみ、全国に散在する会員が集う最後のチャンスととらえ、古平町での開催を模索する事にしました。

私にとっても、健康である今が皆さんにご奉公出来る最後の機会でもあり、古平町に在住する会員の助言とご協力を頂きながら、実現に向けて取り組みたいと思います。



優勢な新鉱脈を発掘し、樽酒で祝った事もありました。



たち

のかまぼこ

竹 内 コ ト

古平育ちの私は、冬になると  
ビールと獲れるスケソウダラを  
毎日眺め、食べてきました。

そのタラの内臓に『タチ』が  
あります。魚の卵の方はもみじ  
子・すじ子・数の子などと言っ  
ていますが、タラの白子をタチ  
と言っています。

はじめは煮つけの汁で煮た  
り、塩をしてから昆布だしの塩  
汁などにして食べていたよう  
ですが、食べ方もだんだん工夫さ  
れて、何時のころからかタチの  
かまぼこが作られるようにな  
りました。

私の家でも母や姉たちが、ほ  
かの人たちの作っているのを見  
よう見まねで、あれこれとやっ  
ていました。塩加減でその固ま  
り具合が違い、ゆで方にもコッ  
プがあるみたいでした。近所に上  
手に作る人がいて、そこへ行っ  
ては聞いたりしていました。  
火を通したくらしいタチを、

ざるでこして塩やでんぶんを入  
れ、すり鉢ですると少し固まっ  
てきます。それをゆでるとぼこ  
んと固まったタチのかまぼこの  
出来上がりです。その家の好  
みや作り方で味や固まり具合も  
違うようですし、また、同じよ  
うにやっても作るたびに少しず  
つ違うものが出来たりします。  
母もだんだん作るのが上手に  
なつてわが家のご馳走になりま  
したが、その作るまでの手間も  
大変でした。

タチは、昔は——と言つても  
昭和四〇年ころまではほとんど  
棄てていました。そのうち、食  
べることにへの関心が高くなつて  
来たせいとか、タチのおいしいこ  
とがわかつてきて値段がつくよ  
うになりました。

スケソウ漁も近年は芳しくない  
ようで、私たちにはなかなか手  
に入りません。東京に移られた  
知り合いから、「タチのかまぼ

こが食べたい。」という電話が  
あり、本間さんに頼んで探して  
もらいました。材料が無いとい  
うことでしたが、それでも、よ  
うやく三個ずつ入った袋を一〇  
袋買って送りましたら、大麥喜  
んでおりました。

今では貴重品扱いで、北海道  
普通ドンド焼き。と言います  
が、古平では調子よく、ドンド  
ン焼き。とも言っていました。

特別変わった行事でもないよ  
うですが、千年程も前から宮中  
で行われ、天皇  
に差し出した文  
書類を庭で焼く  
のが始まりで、  
左義長(さよちやう)  
と言われていま  
した。



その後、民間  
でも行われるよ  
うになった火祭  
り行事です。

昔は小正月といわれた一五日  
前後だったようですが、今は七  
草明けに、しめ縄や門松などを  
焼いて無病息災を祈り、その火

の食材として逸品だと思いま  
す。作るときの手間を考えると  
ぜいたくなおかずだとも思いま  
すが、生前、母が作ってくれた  
あの味を思い出しながら、「今  
年は、スケソが大漁してくれる  
といいね。」と、念じつつペン  
をおきます。

で餅を焼いて食べると病気に  
からない、などという言い伝え  
があります。

△恵比須神社のどんど焼き▽



昔という程ではないが、昭和三十年代ころまでは二世代・三世代の家が多く、戦後とはいえ、良くも悪くもまだ戦前の生活習慣が色濃く残っています。

特に正月の行事などは、各家庭や地域での慣習があり、変化しながらも家庭の行事として受け継がれて来ました。

以前だとこの家庭にも神棚と仏壇はあり、宗教というよりも生活習慣の一部となっていました。

新年の神社や寺院への参詣にしても、

多くは『家内安全・海上安全・大漁や豊作』などの祈願でしたが、昨今は『合格祈願』がそれに取って代わったようです。

ところで正月風景ですが、年々盛んなのは都会の商店街で、生活様式や意識の変化もあってか、家庭での行事といえるようなものは次第に消えていく運命にあるようです。

正月の準備といえはまず餅つきから始まり、日を選んで何軒

かが共同でやります。一家の主婦は料理作りにも忙しく、年末には男がすすはらいや掃除をし、神棚や仏壇はていねいにみがき、家庭の習慣で新年を迎えるお飾りをします。

いよいよ三十一日は年とりで、町の銭湯も朝からお湯を沸かし客でこったがえしです。家の中も片付いて、その夜は家庭の一番のご馳走が並びます。

## 昔の古平の正月風景

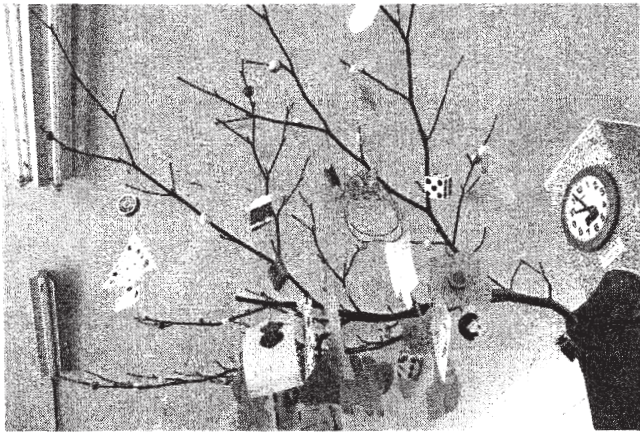
テレ  
ビはも  
ちろん  
ラジオ  
も珍し  
いころ

は、家庭内でのゲームや遊びで時を過ごし、一二時近くになると初詣でに行き交う人たちが街頭が賑わいます。

いよいよ年が明けて一日の朝は、主人や長男が真っ先に起きて若水(おまぎ)を汲みに行くのですが、この習慣は一般家庭では特になかったようです。若水はまず神棚に供え、家族が飲んだり雑煮に使ったり、冷たい水で顔を洗ったりもしました。

また戦前だと、一月元日の祝日(四方拝)天皇が四方の諸神を拝する宮中行事)は学校で儀式があり、児童・生徒のほか町の役職者や有志が参列していました。元日は「お金を使わない日」ということで、商店の初売りは二日でしたが景品や割引があり、買い物客で賑う風景は今も昔も変わらないようです。子どもたちにとっても、この日は

△花の木幼稚園のまゆだま▽



お年玉の貰える最良の日で、古平では、ウマッコとかマッコといい、お年玉を与えることを「ウマッコのせでやる」などと言います。金額の少ないことを「やせ(瘠せ)ウマッコ」と言っていました。

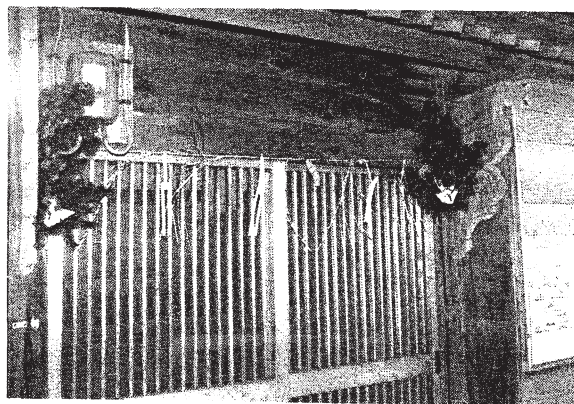
七日までが松の内、元日・三日(きんがにち)・五日(ごだち)にはそれぞれ雑煮、あんこ餅、きな粉餅を食べるといいう習慣もありました。七草は七日の朝、七草を入れたおかゆを食べて祝うという行事ですが、雑煮に有り合わせの野菜を入れて食べるというものでした。次の日はドンド焼きです。

今回、年々失われていく古平の正月風景から、『まゆだま』と玄関の『注連(ぬめ)飾り』をとり上げてみました。

まゆだま(繭玉)は字のように、その年のまゆの収穫の多いことを祈って飾られたものですが、大正時代には、古平でも副業として蚕(カイコ)を飼っていた農家もありました。

花の木幼稚園では園児と父母が参加し、まゆだまを恒例の伝

△浜町・藤枝さん宅の松飾り▽



統行事として行っています。

ミスキの枝ぶりのよいものを選んで、もともとは餅を輪のように巻きつけ、枝の飾りは市販のものの外、各家庭でいろいろと縁起ものや好みのものを下げていました。

しめ縄は、神棚や玄関などに松といっしょに飾りますが、家庭でこの松飾りは見られなくなり、今では車にしめ飾りをする人の方が目立ちます。

浜町の藤枝さんのお宅は、昔の漁家建築の様式を残している数少ない建物です。また、玄関の小屋根を支えている、持送(もろろ)という彫刻のある板が取

土地に南殿・北殿と大きな建物があり、この造営に力を尽くしたのが有名な平清盛です。

ぶらり 寺の 一人旅

室 谷 忠 雄



すが、奇跡的にもこの蓮華王院の三十三間堂だけは難を免れたのです。

体の観音像も火に包まれましたが、幸いにも救い出された百五十六体の観音像をもとにして、十六年の歳月をかけて仏像を作り、本堂の落慶法要が行われましたが、これが現存する三十三間堂の歴史です。

その後二百年程経って木曾義仲の乱があり、そのとき焼き打ちにあつて御所は焼失したので

ところが七百五十年程前、京都がほとんど焼けるという大火があり、三十三間堂と共に千一

また、この三十三間堂の東大門の前には後白河法皇法住寺陵がありますので、併せて拝観することができま



り付けられているのは、古平町 風景が町中で見られ、お正月のでも藤枝さん一軒だけのようで 風物詩でもありました。 △昔ながらの漁家の床の間 沖町・八反田さん▽

蓮華王院といわれてもピンときませんが、三十三間堂といわれれば誰でもよく知っている名前です。 この三十三間堂ですが、今から千年程前は法住寺といい、もとは右大臣藤原為光の私邸でした。ここを大変気にとったのが後白河天皇で、ここに御所を造営し蓮華王院御所としました。 もちろん御所ですから、広大な

短歌

吉平町岬短歌会

誕生日祝ひてくれる友の手紙開けば良き音のメロディーの鳴る

池田 テル

筆まめな友より二ヶ月も来ぬ便り案じ乍らも賀状したたむ

奥山 きよみ

文化の日に受くる賞の嬉しかり着慣れぬ和服に身を正したり

榊 佳代

孫のくれし花束夫に供へつつ舞台の踊りを声に悔やむも

鈴木 時子

菩提寺の境内てらす十六夜をさすらひ歩く北キツネ哭く

竹内 コト

久びさに聞く女性コーラスで好きなメロディーに過ぎしを偲ぶ

田中 香苗

スケソ漁の不漁をかこつ年の瀬を風雪続きて吉報待たる

丹後 初江

寒鰯の反る身昆布にしつかりとしめにし刺身味わひはよし

堀 典子

札幌は五人の孫の住める街われいそと通ふ楽しきひとつ

山口 スエ

俳句

吉平ホトトギス会

古い独りあれこれ省き年用意 斉藤波留

おはようと駆けて行く子の息白し 山口悦子

出港の支度整う十二月 越野敏雄

達磨忌に拓本の軸壁に掛け 大和田絵伊

鯛の抜かれたる鮭山積みに 福井幸平

凍て海白き灯台崖の上 関口勝志

越冬の葱に小高く土をかけ よしざきり

事足りて湯舟につかる年の暮 仲谷比呂古

立冬や古平浜の小夜嵐 越野清治

いささかの昔料理やお正月 室谷弘子

編輯後記

▽新年の紙面を、古平にゆかりのある記事12ページで飾ることができました。じっくりお読みください。  
▽30回連載の吉川さん、ご苦労さまでした。構想を練り、紙面に向き合いたい。  
▽元日を迎え、気分も新たに

健筆をご期待しております。

▽仲谷比呂子さんからご寄贈

▽御大典記念貯金通帳・信組

・勸業債券45枚(明治時代のもの、明治65年12月支払い)